

3人のジャン・ペール・マル『さよなら子供たち』

吉田 咲

I 別れに始まり、別れに終わる

みなさんの中で、映画は好きだという方はどのぐらいいらっしゃいますでしょうか？ 私が映画を初めて見たのは、3歳のとき、大竹しのぶ主演の『あゝ野麦峠』でした。それ以来、父に連れられて、たくさんの映画を見ました。今日は、その中から、みなさんに、冬にご覧になるのにぴったりの映画をご紹介します。今からちょうど30年前の1987年、ルイ・マルがフランスで作った自伝的作品『さよなら子供たち』です。

ここで、ルイ・マルについて簡単にご説明いたします。1932年、フランスの大ブルジョワの家に生まれます。ソルボンヌ大学で政治科学を専攻しますが、中退し、パリのフランス国立映画高等学院（イデック）を卒業します。1958年、自己資金で製作した『死刑台のエレベーター』で、25歳で監督デビューを果たします。映画では、ジャンヌ・モローとモーリス・ロネが不倫カップルを演じます。モーリス・ロネが、勤務先の社長であるモローの夫を自殺と見せかけて殺します。完全犯罪のつもりが、モーリス・ロネが乗っているエレベーターが止まるというアクシデントをきっかけに足がつくという話です。手持ちカメラを主体とした撮影、マイルス・デイヴィスの即興演奏と共に、マルの斬新な演出が、高く評価されました。1968年には第21回カンヌ国際映画祭の審査員に選出されましたが、五月革命の最中に映画祭を開催することに異議を唱え、映画祭を中止に追い込みました。1976年にアメリカへ移住し、映画を撮りますが、1987年にフランスへ戻り、『さよなら子供たち』を製作します。この作品で、2度目となるヴェネツィア国際映画祭金獅子賞など、多数の賞を受賞しています。

『さよなら子供たち』の時は、1944年1月。舞台は、ナチス占領下の、フランスのカソリックの寄宿舎学校です。『さよなら子供たち』（原題 *Au revoir les enfants*）というタイトル通り、出会いと別れがテーマとなっています。最初のシーンでは、12歳の主人公ジュリアン・カンタンー彼はルイ・マルの自画像ですが、母と駅のホームで別れを惜しんでいます。クリスマス休暇を終えて、寄宿舎学校に戻らなくてはならないからです。ジュリアンは、お母さんにおでこにキスされ、列車が発車した後、お母さんの口紅がついたおでこを車窓に張り付かせます。ジュリアンが寄宿舎学校に戻ると、ジャン・ボネが新入生としてやって来ます。ジャン・ボネは、詩の解釈、数学の証明問題、ピアノ演奏、すべてにおいて才能を発揮します。ジュリアンはそんなジャンをライバル視し、曲折を経ながらも、急速に親しくなっていきます。しかし、ジャン・ボネは、実はユダヤ人で、レジスタンスに参加していた寄宿舎学校の校長ジャン神父が、ナチスからかくまっていたのです。寄宿舎学校にユダヤ人がかくまわれているという密告があり、ナチスが学校に乗り込んできます。

ラストシーン。校長のジャン神父を先頭に、ジャン少年と他のユダヤ人少年も、ナチスに連行されていきます。子供たちは口々に「さよなら神父さん。」と言います。それにこたえて、ジャン神父は、「さよなら子供たち。」と言います。ジュリアンは涙をこぼして、ジャン少年とジャン神父との別れを惜しみます。ナレーションから、ジャン少年はアウシュビッツで、ジャン神父はマウトハウゼンで亡くなったことがわかります。

映画は、実の母との一時の別れから始まり、宗教上の父との永遠の別れで終わる。そんな構成になっていると言えます。

II 少年たちのエロスの交歓

二人の少年は二項対立的に描かれています。まず、外見です。ジュリアンはブロンドのストレートヘアなのに対し、ジャンは、黒髪で、縮れ毛です。次に、性格です。ジュリアンは、好奇心旺盛で活発ですが、ジャンは控えめで無口です。最後に、宗教です。ジュリアンは、キリスト教徒で、将来は司祭志望ですが、ジャンは、夜、皆が寝静まってから、一人ろうそくをつけて祈る、熱心なユダヤ教徒です。

では、二人の結びつきはどのようなものだったのでしょうか。ジュリアンは神父から、「新入生に親切にしてください。ほかの生徒も君を見習うようになるから。」と言われます。しかし、ジュリアンはアガペーの精神から、ジャンに近づくわけではありません。学業にも音楽にも才能を発揮するジャンは、表向きはプロテスタントだと言っていますが、何か秘密があるようです。その秘密を知りたい、と思って接近するのです。ジュリアンは、誰もいないときに、ジャ

ンのロッカーをあさります。そして、ジャン・ボネの本名はジャン・キペルシュタインで、ユダヤ人であることを知ります。

ジャンの秘密を知ったジュリアンは、それを他の生徒に漏らすことはしません。二人だけの秘密にします。秘密を共有する二人の間に交わされるのは、エロスです。空襲警報が鳴っているときに、防空壕に隠れず、二人でこっそり、ピアノでジャズの連弾をします。鍵盤をたたきながら、二人は笑いあいます。また、夜、消灯後にベッドの上で、ジュリアンがジャンに『千夜一夜物語』を読み聞かせます。読まれるのは、王女が性交するシーンです。「二人の営みは果てるまで続いた。」とジュリアンが読み終えた後、ジャンは性の営みを終えたかのように眠りに落ち、ジュリアンはそれを見つめます。二人は、音楽と文学を通じたエロスの交歓を行っていると解釈できます。

III エゴイズムと無関心でなく

少年二人は、二項対立的に描かれていますが、二項対立は他にもあります。寄宿舎学校の子供たちがあらわにするエゴイズムと、ジャン神父たちの、キリスト教に基づく、他人を愛し、思いやる教育です。子供たちは、新入りのジャンが入ってきたときにも、親切にするどころか、枕を投げつけたり、歯ブラシを背中に入れたりします。ジャンじしんは、給食の配膳で、肉が一切れしか残っていないと、自分は取らずに他の子に譲る、そんな優しい少年なのですが。給食のときに、子供たちの一部は、自宅から送られたジャムなどを独り占めして食べています。神父に「個人で食物がある人は友達にわかるように。」と言われて初めて、他の生徒にも分け与えます。しかし、それでも独り占めをやめない生徒もいます。

寄宿舎学校の子供たちは、裕福なブルジョワ家庭の子弟です。彼らがむき出しにするエゴイズムは、彼らの家庭の雰囲気ないしは教育がなせる業でしょう。ジャン神父は、父兄が集まったミサで、「今は不和と憎悪の時代だが、信者の義務は愛にある。地上の富は魂を腐らせ、人間をエゴイスティックで冷酷な存在にする。エゴイズムと無関心から私たちを守らなければいけない。」と説教しますが、説教に怒って席を立つ父兄もいます。ジャン神父の説教では、私が暗唱した、第一テサロニケの「誰も、悪をもって悪に報いることのないように気をつけなさい。」という箇所が引用されます。

ルイ・マルは、子供たちのエゴイズムを描くことを通して、フランスブルジョワ階級の大人たちの利己主義と、ナチスのユダヤ人虐殺に対する無関心をあぶり出し、批判しているのです。

映画は、冬の寒々とした光景を、青を基調として描いています。これは、ユダヤ人の人権を無視するという、時代の寒々しさであると同時に、ブルジョワ階級の冷淡さも象徴しています。

レジスタンスに参加し、命を賭してユダヤ人少年たちをかくまったジャン神父。彼がキリストに倣う存在であることは明らかです。キリストを売るユダに当たる存在が、寄宿舎学校の料理番の青年ジョゼフです。彼は、学校の食材を勝手に持ち出して闇市で売っています。そのことが明るみに出たため、解雇されます。自分がスケープゴートにされたと感じたジョゼフは、寄宿舎学校にユダヤ人少年がかくまわれているとナチスに密告します。スケープゴートがさらなるスケープゴートを探し出す。そんなジョゼフの人間性が描かれています。マルには、対独協力者の青年ルシアンを描いた『ルシアン青春』（1974）という作品がありますが、ジョゼフの人物造型はルシアンと通じています。

IV 3人のジャンへ

映画が、ジャン神父と、ジャン少年という、二人のジャンを悼んで作られていることは、簡単に見て取れます。しかし、私は大人になって、ある映画を見ることで、もうひとりのジャンへのオマージュでもあることに気づかされました。29歳で夭折した映画監督、ジャン・ヴィゴです。彼が1933年、28歳で作った『操行ゼロ』（Zéro de conduite）は、フランスの寄宿舎学校が舞台になっています。教師が生徒を「操行ゼロにするぞ」と言って脅す。そんな管理的な学校体制に子供たちが反抗し、革命を起こすというストーリーです。寝室で枕の羽毛が飛び散る中、白いバジャマの子供たちがスローモーションで行進するシーンは、映画史上に名高い美しいシーンです。映画はフランスの教育行政の批判と受け取られ、1946年まで13年間上映禁止でした。

『さよなら子供たち』では、父なるジャン神父と、子なるジャン少年、そして画面には登場しない聖霊ジャン、3

人のジャンが三位一体となって、オマージュが捧げられているのです。

3人のうち、特に大人2人の共通点は何でしょうか。人権抑圧に抵抗したということです。ジャン神父は、レジスタンスに参加し、人権をはく奪されたユダヤ人を擁護しました。ジャン・ヴィゴは、生徒の自由を認めない学校体制を批判しました。

V 映画が問いかけること

この映画が、今を生きる私たちに問いかけること。それは、他者を自分のように思い、共に生きることができているのだろうか、ということだと思います。世界に目を向けますと、アメリカの新大統領による移民排斥政策や、イスラエルにおける、パレスチナ民族排斥政策があります。日本国内では、沖縄の米軍基地の問題や、いまだに続いているハンセン病患者に対する根強い偏見などがあります。これらの問題が解決されないでいる根本には、ルイ・マルが批判した、エゴイズムと無関心があると思います。今を生きる私たちに、あなたはどう生き、どう行動するのか。そんな問いを投げかけている映画だと思います。

マルは、個人的な体験を、40年かけて普遍的なメッセージを持つ映画に昇華させました。私は、映画から普遍的なメッセージを読み取ることを目指してきましたが、最後に、映画にまつわる個人的な体験をお話したいと思います。

私がこの映画を見たのは、1989年1月7日、13歳のときでした。主人公の少年とほぼ同じ年齢でした。その日の日記を読みます。

1月7日土曜 晴れ 「さよなら子供たち」をみに行きました。フランスのルイ・マルという巨匠の映画ということで、どんなのか楽しみでした。映画は40数年前の出来事でした。どことなく、くすんでいて、ぜんぜんかんでいませんでした。自然で流れるようでした。でも、最後の場面は心にうたえてきました。2人の少年が最後の別れをするんです。ジュリアンが手をあげ、ボネがふりむきます。ここで、思わず涙しそうになりました。ボネはすぐにドイツ兵にせきたてられ、門から消えていきます。涙をながしながらずっと門を見つめるジュリアン。なんてすばらしい映画なんだろう、とすごく感動しました。「芙蓉鎮」(注：中国の文化大革命に翻弄される庶民を扱った映画)よりも素晴らしい映画でした。今日、とうとう天皇がほう御しました。1月8日からは「平成」時代になるそうです。昭和の生き残りといわれる日が来るのだと思うと、なんかへんな気持ちです。

こんなふうに記しています。

この日、渋谷の映画館を父と一緒に出ると、「昭和天皇崩御」の号外が配られていました。かつて神とされた天皇が亡くなった日に、神が死んだかのような時代を描いた映画を見たのです。ラストシーンのナレーションで、ルイ・マルは、「40年以上が過ぎた。しかし、私は死ぬまで、この1月の朝を忘れないだろう。」と言います。私も彼に倣って言いたいと思います。「30年が過ぎた。しかし、私は死ぬまで、この1月の日を忘れないだろう。」と。

ルイ・マルは、この映画を「3人のジャン」に捧げていますが、私は、今日のこの話を「3人の父」に捧げたいと思います。一人目は、芸術作品に触れる喜びを教えてくれた父吉田豊です。二人目は、芸術作品を分析する方法を教えてくださいました新井明先生です。三人目は、芸術作品について話す機会を与えてくださった月本昭男先生です。3人の父を与えてくださった、父なるおん神様に感謝し、結びとさせていただきます。ご清聴ありがとうございました。